様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３３８０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３１９５

研究課題名（和文）精神看護学教育のための統合失調症の闘病記の分析

研究課題名（英文）Analysis of autobiographies of people with schizophrenia for mental health nursing education.

研究代表者
小平　朋江（KODAIRA, Tomoe）

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号：５０２５９２９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,700,000円、（間接経費）　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：精神看護学教育で患者の共感的理解のためのナラティブ教材の教育的活用を展望し、統合失調症の体験と回復について闘病記をテキストマイニングと伝記分析で量的・質的に分析した。教材を授業で活用し効果をテキストマイニングで確かめ、統合失調症の回復した姿のイメージを持つことを可能にする教育的意義が明らかになった。教材活用の実践継続と共に、豊富にある闘病記から統合失調症の回復の姿をさらに分析することが課題である。

研究成果の概要（英文）：In order to utilize them as narrative educational materials for mental health education, experiences and recovery expressed in autobiographies of people with schizophrenia were analyzed by text mining and biography analysis methods quantitatively and qualitatively. The results of the research verified the educational effects of the use of those autobiographies in class, such as positive image acquisition through narrative of illness. Further research is necessary to analyze the vivid recovery image from the rich resources of those autobiographies.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：精神看護　看護教育　統合失調症　闘病記　ナラティブ　教材　テキストマイニング　伝記分析

１．研究開始当初の背景

入院中心の医療から地域の中で当事者が生活していく支援という精神看護学での理論と実践の変化がある。特に統合失調症では、学会による病名変更が 2002 年になされ、家族や当事者の意識が大きく変化してきている。Peplau 理論の流れをくむ Barker は、Tidal Model において、当事者にとって重要なのは、自分の「物語を取り戻し、生活を回復する」ことであると述べている。

当事者の物語は、精神看護学にとって重要な研究課題であるにもかかわらず研究は進んでいない。さらに闘病記には精神看護学に限らず、当事者援助機能があることが指摘されている。

闘病記は看護教育への活用も行われている（例えば門林他, 2007;岡本・長谷川, 2007）。当事者の語りを文章とビデオによりホームページで紹介する英国の DIPEx の取り組みは、患者やその家族だけでなく、医学教育にも利用されており、日本では DIPEx-Japan が前立腺がんと乳がんについてのウェブサイトを完成させた（Ito, et al 2010 参照）。

筆者らは、精神看護学や心理学の立場から共同で統合失調症への偏見低減教育の研究を行ってきた（Kodaira & Ito 2009: Ito, Kodaira & Inoue, 2010 など）。また語りのテキストを量的分析する研究も行ってきた（小平・伊藤, 2009: 小平・いとう, 2010 など）。テキストマイニングには質的分析と量的分析を行きつ戻りつする原文参照機能がありテーマ(主題)分析に有効である。質的分析と量的分析を有機的に結合した当事者の物語りの研究を推進する。

本研究では、語りを内容的に分析する質的研究とテキストマイニングによる量的研究とを結合させ、統合失調症の当事者の物語を分析することにより、当事者の人生における病いと回復のプロセスを明確化するために研究を進める。

２．研究の目的

精神看護学教育において患者の共感的理解のためのナラティブ教材の教育的活用を展望して、統合失調症とはどのような体験であるか当事者の闘病記によって明らかにする。精神看護学の教科書においては、学生にとって当事者の病いの体験についてリアリティある理解ができるように闘病記や手記の引用も珍しくない。筆者らは、当事者が病いの体験を綴った闘病記などを「ナラティブ教材」（小平・伊藤, 2009）と名づけて、偏見低減のために講義で活用を試みる実践と研究に取り組んできた。

統合失調症の闘病記の単行本がどれだけ発行されているかの実態を明らかにするため、当事者により記述された闘病記の可能な限りの検索と収集を試みる。時代的変遷を可視化して確認することを目的として、その書名・副題を対象にテキストマイニングの手法により、その表現の特徴、特に用いられた単語を分析する。そして、ナラティブ教材になりうる統合失調症闘病記を対象にテキストマイニングにより大量のテキストデータから量的分析を行なうとともに、伝記分析（西平,1996）の方法により、質的研究を行なう。量的分析と質的分析を統合し当事者の物語る人生における病気と回復のプロセスを明らかにする。

それらの結果をふまえて精神看護学教育への教育的活用を展望するため、授業で実際にナラティブ教材として闘病記を活用し、その効果を確認する。学生の視点からの効果を確認するため自由記述回答をテキストマイニングで分析する。

３．研究の方法

（１）統合失調症闘病記の収集とリスト化

闘病記の収集は、闘病記ライブラリーのウェブサイト、公立図書館の闘病記文庫ウェブサイト、精神看護雑誌などから情報を得て、単行本や手記の検索・収集を行う。闘病記リストを作成し、発行年代別の推移をみるためのグラフの作成を行い可視化する。

（２）統合失調症闘病記の量的・質的分析

まず前述でリスト化した闘病記の書名・副題を対象にテキストマイニング分析を行う。

そのリスト化した闘病記の中で、教育的活用が可能なものを対象にテキストマイニング分析を行う。量的分析としてテキストマイニング分析では Text Mining Studio（NTT データ数理システム）を用い、個別分析や比較分析を行う。個別分析とは、各単行本毎の闘病記の分析である。基礎統計量、評判分析、注目語分析、ことばネットワーク、等の手法による分析を行う。比較分析とは、著者間の比較による分析である。各著者を独立変数とした各種の分析をおこなう。各著者による特徴語分析が有効であると考える。このような分析により、当事者の物語を主に量的研究の観点から考察する。

質的分析として闘病記を対象に伝記分析の考え方に基づき、当事者の物語りをとおして、その苦しみと回復の過程を明らかにすることでリアリティある分析を得る。テキストマイニングツールによる原文参照機能により、エビデンスに基づく分析を行う。量的分析と質的分析の結果を統合しながら病いの物語を総合的に考察する。

（３）精神看護学授業でのナラティブ教材活用の効果

看護大学生に対してナラティブ教材を用いた精神看護学の授業の進行にともない、統合失調症に対するイメージがどのように変化していくかを明らかにするため、単元「統合失調症の看護」（2 コマ）で、「統合失調症のイメージ」を自由記述回答で答えてもらった。この同じ問を、時期を変えて計 3 回記述

してもらった。事前調査 A（1 回目）は、単元 1 コマ目の講義開始時、事後調査 B（2 回目）は単元 2 コマ目の講義終了時、事後調査 C（3 回目）は全ての講義終了間近の時期に調査を行った。延べ 595 名の回答を分析対象とし、テキストマイニング分析を行った。本研究は、研究代表者の所属大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

（１）統合失調症闘病記の収集とリスト化

単行本として出版されたことを筆者らが認識したのは、2012 年 1 月 24 日現在 217 冊あった。現時点で明らかなもっとも古い出版は 1941 年であった。

検索や直接現物を入手するなどして概観した結果、小説 （玄侑，2001；竜人，2010 など）や詩集（高村，1941；竜人，2010；SumiNasu，2011 など)、マンガによる表現を含むもの(中村，2008；佐俣・肥田，2010；中村，2010；中村・当事者のみなさん・福田，2011)がある。出版形態としては単行本ではあるが「ブックレット」としてシリーズで出されているものもあった。「幻聴妄想かるた」の解説冊子として統合失調症の体験が述べられているものもある（ハーモニー，2011)。

10 年ごとの統合失調症の闘病記の発行点数の推移を見ると、1940 年代は 2 点、50 年代は 1 点、60 年代は 3 点、70 年代は 5 点、80 年代は 9 点と一桁であるが、1990 年代に入って 29 点と一挙に増え、2000 年から 2009 年では 136 点と爆発的に増えている。2010 年から 2012 年 1 月現在までの 2 年間余でも 32 点出版されており、この勢いは今後も続くと思われる。単行本の発行点数からすると、2000 年代になって出版が急に増大している。

今回の成果として、検索のためのリソースの存在や冊数などの量的な規模、表現方法の特徴の違いなどが明確になったことは非常に貴重な資料ではないかと考えている。ナラティブ教材となりうる統合失調症の闘病記は量的にも質的にも豊富であると言えることが分かった。

（２）統合失調症闘病記の量的・質的分析

まず、統合失調症闘病記をナラティブ教材として教育活用するために前述の 217 冊の統合失調症闘病記に関する文献情報を分析対象とし、書名・副題をテキストマイニングで分析した。

その結果、最も高い頻度で出現した単語は 29 回の「統合失調症」で、次に「心」(26 回)、次に「生きる」(18 回）が現れ、「精神障害者」と「病」の出現頻度は 12 回であった。ひらがな表記の「こころ」も 10 回あり、漢字表記と合わせると 36 回出現し、「こころの病い」としての統合失調症の特徴をよく表している。

時代区分で見ると、2002 年の病名変更を境にして、それ以前では「分裂病」(10 回)、「精神分裂病」(3 回）が多く、2003 年以降は、「統合失調症」（28 回）の表現が多く用いられている。しかし、これら 3 つの単語の頻度を合計しても 47 回で全体の 21.7%であり、書名に病名が出てくることは少ないといえる。「分裂病」「体験」「少女」「自分」「記録」「精神病棟」などは 2002 年以前によく使われた表現であり、「患者」「精神障害」「生きる」は 2003～2007 年によく使われ、「母」「軌跡」「なれる」「統合失調症」「風」「人生」などは 2008 年以降によく用いられた単語である。

「精神分裂病」「分裂病」「分裂病者」21 件と「統合失調症」29 件のどちらかが書名・副題に明示されているものは合計 49 冊で全体の 22.6%であった。詳しくは、「精神分裂病」7 件、「分裂病」11 件、「分裂病者」3 件で、時代別に見ると主に病名変更した 2002 年以前の書名の 2 割に用いられていた。「統合失調症」を含む書名は 29 件で、病名変更の 2002 年の 1 件を例外として、それ以外は 2003 年以降の書名に使用されている。この急増は病名変更で統合失調症患者や家族がよりカミングアウトしやすくなったことの反映であろう。しかし、2003 年以前でも以降でも約 8 割の書名には病名が明示されていない。これ以外の表現として、「病」または「病い」12 件のうち 11 件が「心」または「こころ」という単語と結びついて用いられている。

筆者らが注目した単語は「生きる」18 件である。病気や精神病者が「生きる」にかかる書名・副題は 11 件あり、病気「を生きる」型 4 件と、病気「と（ともに）生きる」型が 7 件の 2 つに分類できた。2002 年までは 2 件とも「を生きる」のみであった。2003～2007 年は 6 件のうち「を生きる」が 2 件で、4 件が「と生きる」「と共に生きる」であった。2008 年以降の 3 件のうち、すべてが病気・障害「と（ともに）生きる」型であった。「を生きる」型の 4 件は 2005 年までに限られ、「と（ともに）生きる」型の 7 件は 2003 年に 2 件初出し、2006 年以降はこの型に限定されるという時代変遷が確認された。

病名明示が少ない理由としてスティグマ・偏見の影響、著者の病識や納得の度合い、闘病記の本質としての自分を語ることの意義、の 3 つが考えられた。病気・障害「とともに生きる」の表現が 2003 年から現れ、「を生きる」の表現が消えたことは、病いと闘う姿勢から客体化しつつ共生する姿勢へと移行した事の反映であると考えられる。

次にナラティブ教材になりうる闘病記を 217 冊のリストの中から選択し、実際にテキストマイニング分析を行った。

統合失調症の当事者の佐野卓志と主治医の三好典彦の 2005 年の共著『こころの病を生きる：統合失調症患者と精神科医師の往復書簡』（中央法規）は、患者と医療従事者の視点の相違を物語として理解する上で優れた闘病記である。ここでは、テキストマイニングで本書における病いの語りの構造にお

ける患者と医師の相違点を、質的分析ではなく量的な根拠に基づいて明らかにした。

その結果、著者毎の単語頻度の比較は、頻度の多い上位 20 語に示されるように医師の三好の章では「S さん」「こころ」「波長」「病者」「言葉」「考え」の比率の多さが目立った。これに対して、当事者の佐野の章では「幻聴」「友達」「先生」「病院」「女性」「親」という単語の使用数が多かった。

当事者の語りは症状や人間関係についての記述が多かったのに対して、医師の語りは、人間関係についてのものと治療のプロセス・メカニズムに関するものが多かった。当事者と医療者との違いが単語使用や、本書のように、当事者視点と医療者視点が直接比較できる資料は貴重である。ナラティブ教材として教育的活用の意義が大きい。

（３）精神看護学授業でのナラティブ教材活用の効果

学生が表現した単語に着目すると、特徴語分析の結果、学生はナラティブ教材を活用した授業前には統合失調症のイメージとして、「恐い」ので「関わりたくない」と捉えていたのが、ナラティブ教材を活用した授業後において、統合失調症のイメージとして「暴れる」が、「慢性期」や「急性期」という時期があり、「日常生活」は「生活できる」と変化していた。

評判分析の結果、好評語は事前調査 A はポジティブ評価が 16 人（6.5%）に出ており、事後調査 B は 32 人（16.2%）に出ており、事後調査 C は 26 人（17.3%）に出ていた。Somers の d による近似 t 値（t = 3.639, p < .001）が有意であったので、出現率の残差分析を行ったところ、事後調査の B と C との間には、有意差が無かったが、事前調査 A よりも事後調査 B,C の時期のほうが有意に好評語の割合が多かったことが明らかになった（A の調整残差 = -3.7, p <.05)。

不評語については、事前調査 A はネガティブ評価が 88 人（35.5%)、事後調査 B は 57 人（28.9%)、事後調査 C は 37 人（24.7%）に出ていた。Somers の d による近似 t 値（t = -2.375, p =.018）で有意であったので、3 つの時期の出現率の残差分析を行うと、事後調査の B と C の間には、有意差が無かったが、事前調査 A よりも事後調査 B,C の時期のほうが不評語の割合が少なかったことが判明した（A の調整残差= 2.2 p <.05)。

以上を要約すると、ナラティブ教材を提示した後は、好評語が増加し、不評語が減少したことが統計的に証明された。

闘病記などのナラティブ教材から学ぶ間接的経験を通して、学生は自らの偏見に気づくと同時に当事者視点で統合失調症を病む体験がどのようなものであるか、そして回復していく姿をも学んでいくと考えられた。

（４）本研究の意義と課題、今後の展望

統合失調症の体験と回復について闘病記をテキストマイニングと伝記分析で量的・質的に分析した。教材を授業で活用し効果をテキストマイニングで確かめ、統合失調症の回復した姿のイメージを持つことを可能にする教育的意義が明らかになった。効果的なナラティブ教材の教育的活用を展望した実践の継続と共に、豊富にある闘病記から統合失調症の回復の姿をさらに分析することが今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 小平朋江、いとうたけひこ、統合失調症当事者の語りのテキストマイニング：闘病記のタイトル分析を中心に、看護研究、査読無、**46(5)**、2013、485-492

② いとうたけひこ、テキストマイニングの看護における活用、看護研究、査読無、**46(5)**、2013、475-484

③ 小平朋江、いとうたけひこ、ナラティブ教材を用いた精神看護学授業での統合失調症のイメージの変化：テキストマイニングによる特徴語と評価語の分析、日本精神保健看護学会誌、査読有、 **22(2)**、2013、 68-74

④ 小平朋江、いとうたけひこ、統合失調症の闘病記のリスト：ナラティブ教材の可能性を展望する、心理科学、査読有、**33(2)**、2013、64-77

〔学会発表〕（計 4 件）

① 小平朋江、いとうたけひこ、 『こころの病を生きる:統合失調症患者と精神科医師の往復書簡』の当事者と医者の語りのテキストマイニング、第 33 回日本看護科学学会学術集会、2013 年 12 月 7 日、 大阪国際会議場

② 小平朋江、いとうたけひこ、統合失調症闘病記の書名のテキストマイニング、日本心理学会第 77 回大会、2013 年 9 月 19 日、 札幌コンベンションセンター

③ 小平朋江、いとうたけひこ、 ナラティブ教材を用いた精神看護学授業における統合失調症のイメージ向上：テキストマイニングの評判分析、第 32 回日本看護科学学会学術集会、2012 年 12 月 1 日、東京国際フォーラム

④ 小平朋江、いとうたけひこ、統合失調症の闘病記のリスト：ナラティブ教材の可能性を展望する、日本心理学会第 76 回大会、2012 年 9 月 11 日、専修大学

６．研究組織

(1)研究代表者

小平　朋江（KODAIRA, Tomoe）

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教
授
研究者番号：５０２５９２９８

(2)研究分担者
伊藤　武彦（ITO,　Takehiko）
和光大学・現代人間学部・教授
研究者番号：　６０１７６３４４